

NBF

公益財団法人 日本舞踊振興財団

Information

No. **65**
2025 NEW YEAR

目次

- ▶ 名手訪問 / 対談 白石 統一郎 氏 (映画 プロデューサー)
- ▶ 特別会員御芳名
- ▶ 日本舞踊誌上講座 / 日本舞踊の歴史を振り返る④
— 勸進帳の系譜⑤ —
東京大学名誉教授 古井戸 秀夫 氏
- ▶ NBF活動報告・行事予定
- ▶ 講演会 / 日本舞踊で覗く江戸とその暮らし、その魅力②
日本大学芸術学部教授 小林 直弥 氏



名手訪問

— 対 談 —

- 白石 統一郎 ((株) C. A. L 代表取締役)
- 西川 均 (公益財団法人 日本舞踊振興財団 業務執行理事)

[敬称略]

● 西川 本日は宜しくお願いたします。まず、代理店の仕事について教えていただけますか？時代劇などにはどのような形で関わっていらっしゃるのでしょうか？

● 白石 このポスターの「NHK BS 大岡越前」は、主役を東山さんが10年間務め、前シリーズから高橋克典さんに代わり現在まで続いています。



出典: CAL ウェブサイト <https://www.cal-net.co.jp/>

弊社《CAL》の話からさせて頂きまずと、会社自体が出来たのが1966

年、約60年位前です。1950年代というのは映画全盛、60年代に入ってテレビが徐々に台頭してきました。そういった中で、当時の映画の主流というのは時代劇。それで、いずれ時代劇も映画からテレビに移るはずだ、テレビでも時代劇がこれから流行っていくに違いない、と考えた方々がいらっしゃいました。それがあの黒澤明監督の脚本を書かれていた方々で、橋本忍さんはじめ4名。黒澤映画には欠かせない脚本家の方々の発案で、「時代劇を作るテレビの制作会社を作るべきじゃないか」ということで立ち上がったのがこの会社です。

● 西川 テレビ用時代劇の制作会社ということですね。

● 白石 そうです。どうもその4名の方は、黒澤監督も、いずれテレビで活躍できるのではないかとお考えになったようです。結果的にはそうならなかったのですが。それで、当時の映画を作っている京都の監督やスタッフを使って、テレビ時代劇を作り始めたわけです。最初の1作目に「剣シリーズ」という作品を作ったのですが、モノクロで当時の有名監督が1話ずつ撮って、出演者も若かりしく三國

連太郎さん〉〈丹波哲郎さん〉〈緒形拳さん〉などでした。一本の「剣」が主演となり、次から次へといろいろな人の手に渡って毎回話が進んでいくという、この会社にとって初めてのテレビ時代劇だったのですが、莫大なお金がかかって、その1シリーズで潰れそうになっていた、という話は聞きました。ただそこで、当時のナショナルの社長、松下幸之助さんの「家族で楽しめるドラマを作ってほしい」という要望で製作されたのが「水戸黄門」です。



出典: CAL ウェブサイト <https://www.cal-net.co.jp/>

大きくかかわることになりました。私が電通から出向して9代目の社長となりましたが、《CAL》が電通のグループ会社であることは、電通の中でもあまり知られていません。基本的に昔から、広告代理店の大きな収入というのはテレビビジネスで、その営業の部分をほとんど、電通が仕切っていました。番組提供スポンサーを見つけてきて手数料を頂くという、いわゆるマージン商売です。それがテレビメディアの成長と共に、電通を大きくしてきた原動力です。私自身はラジオ・テレビ局という組織の中で、クライアントのために番組企画を提案し、1社提供の番組制作に関わってきました。それこそ、「水戸黄門」もナショナル1社提供でしたし、「世界ふしぎ発見」は日立1社提供でした。当時は会社のビジョンを伝えるために番組を1社で提供して放送する、という流れがあったんです。私のキャリアは電通の中でも比較的珍しく、最初はテレビ番組の製作をしていましたし、その後は映画の製作にも関わりましたし、その間にイベントであるとかアニメであるとか、エンターテインメント系の仕事中心にやってきました。

西川 確かにナショナルが提供でしたね。

白石 そうです。それが1969年。この会社ができて3年後に「水戸黄門」が松下幸之助さんの鶴の一声で始まったということです。家族みんなで楽しめるホームドラマ的な時代劇という作品で。そのおかげで、会社はそれ以降続いてきたわけです。そのタイミングで、電通がこの《CAL》に

西川 今、話をお伺いして、「水戸黄門」が出发点という話でしたが、ここまで時代劇に特化した製作をしていたわけではないんですね。

白石 ええ。様々なジャンルの番組を製作しています。但し、時代劇のヒット作品が多く、「水戸黄門」だけで42年間です。

西川 何代までいらっしゃるんですって？



東野英治郎さんから始まって。

- 白石 東野英治郎さん、西村晃さん、佐野浅夫さん、石坂浩二さん、里見浩太朗さん、そして武田鉄矢さんはBS-TBSで2年間放送しました。《CAL》の「水戸黄門」としては6名。



出典: CAL ウェブサイト <https://www.cal-net.co.jp/>

それと、会社にとって非常に大きなことは、今のテレビ番組は、番組の著作権をほとんど放送局がお持ちになっていて、それによって制作会社が生き辛い状況になっています。「水戸黄門」が立ち上がった1969年には、番組の権利だとかいうことを意識している人達って、ほとんどいらっしゃらなかったんです。弊社を立ち上げた初代社長の息子さんが、もともとハリウッドで仕事をされていて、海外のエンターテインメントビジネスを、本当によく知っている方だったので、「水戸黄門」が立ち上がった時に、制作した《CAL》に権利が残るような仕組みを交渉してくれたそ

うです。その当時、電通も放送局も、「いいんじゃない」ということでそうなり、それから42年間続いたナショナル劇場で放送された時代劇「大岡越前」「水戸黄門」、それ以外にも「江戸を斬る」など何本もあるんですけども、そういうものに関しては、すべてうちの著作になっているんです。これが他の制作会社と大きく違う所で、この40何年間の時代劇の著作を《CAL》が保有しているということが、結果的に今、非常に大きなビジネスになっています。今や番組は権利の奪い合いで権利を持っていないと、二次利用、三次利用できませんから、結局権利をとるために番組を作っているようなものなんです。そして時代劇自体は古くならない。江戸時代は、誰も見たことがなくて、最初からフィクションですから。古い時代の話なので、いつの時代になっても売れるんです。「水戸黄門」は、新作が今作られてはいないんですけど、過去のものが何千本ってありますから、それが繰り返し繰り返し放送されるのでビジネスとしてもありがたいですし、「水戸黄門」が忘れ去られない、といった面でも時代劇のコンテンツとしての強さを実感します。

- 西川 我々の古典芸能も、江戸時代のことですから、誰も元を知らないわけです。それを現代の我々が表現しているのですが、なかなか今の現代人にそのまま受け入れてもらえませんね。テンポ感であるとか、受け入れ難い部分がきつとあるんですね。でも今仰ったみたいに、コンテンツとしてはやはり古いものというのは、その可能性はすごくあると思います

ね。それをどういう切り口にするのか、ちょっとしたアレンジを加えることによって、本質を変えないで魅するという可能性を秘めているのかな、という思いはあります。それで、色々な方にお話を伺う中で、何か見えてくる所があればと思っています。一方で、今仰ったようにテレビ産業というのも、メディア産業というものも、10年前とは全然変わってしまったんじゃないですか？若い人達がテレビを持っていない、見ない。私も朝ドラや大河の所作指導をやっていて、10年位前までは視聴率が毎週月曜日になると書かれていたんですけど、テレビをオンタイムで見てる人があまりいなくて、録画して後で見るとか、BSで見るとか、色々な視聴方法が出来てきたので、視聴率がなかなか測りづらいというのもあるようですがね。そういうふうに、メディアの在り方というのが変わってきている中で、コンテンツを作る中で、時代劇というのは現代劇に比べてお金がかかるじゃないですか。

白石 最低限かかるお金というのは現代物とは全然違います。

西川 よく聞くのは宝塚でも、商業演劇でも時代劇というのは制作費がかかる割に、回収がなかなか難しい部分がある。そういう中でこうやって今だに新しい時代劇を作って、BSとはいえ時代劇をちゃんと作っているということの意義というものでしょうか。会社の処世みたいなものでしょうね。

白石 もう看板になっていますから。


西川 そのへんの今後のメディアとして


の方向性、そのコンテンツ、内容をどう展開していくのかというのは、どういうふうにお考えですか？

白石 そもそも初めて西川さんとお会いした時に、私がものすごく共感したのが、日本舞踊の将来についてお話しされていたことです。非常に危機的な状況にあると…。それは私が日ごろ時代劇に感じていること全く同じだったんですね。だからやはりそこにすごく共感しましたし、同じ危機感を抱えていて、時代劇、日本舞踊、古典芸能、基本同じ土俵にあるコンテンツだなと…。私がこの会社に来たのが、2011年なのですが、その年に「水戸黄門」の放送が終わったんです。その背景にはもちろん視聴率もあって、一時40%くらいとった時代もあったのが、一桁になってきたということもありますし、メディアの中には時代劇は老人しか見ない、という先入観がある。それは確かにその通りなんです。やはり中高年がターゲットですから。そこに対してテレビのスポンサーというのは比較的若い世代に発信していく商品が主流なので、30代、40代くらいまでをターゲットにしています。民放のテレビ局から「水戸黄門」が終わったことによって時代劇のシリーズというのはすべてなくなりました。今でも単発がたまにありますけど、シリーズとして放送するのは、NHKしか残ってないです。NHKは公共放送ですから高齢者のためになんとか時代劇枠を残してくれていますので、そこで「大岡越前」シリーズを作らせていただいているという状況なんです。そして多くの人からよく言われたのは、現在放送をしている時代



劇、そこそこ見て頂いている人がいらっしゃいますが、やはり高齢者の方なので、その方々が亡くなったら見る人がいなくなってしまうということです。確かにそうなんですけれども、自分自身がこの会社に在籍する間に50代から60代へと歳をとりましたが、そうするとやはり時代劇の魅力というのは、若い時代にはわからない部分もあって、ある程度の年齢になると時代劇を見たくなくなるという人達も増える、ということに気付いたんです。

 西川 若いころには全然興味がなかったけれども、ということですね。

 白石 そうなんです。今の巷にあふれているドラマって、ラストがわからずに、皆、ハラハラドキドキしてシリーズ通して見ていく。そういうドラマが主流なんですけど、ドラマのジャンルには、結末がわかっているんだけどそのプロセスを楽しむ、一話でお決まりのカタルシスを得られる、安心して観られるドラマのジャンルというのがあるんですね。今は偏ったジャンルばかりで、それは若い人をターゲットにしているからなのですが、そもそもテレビ時代劇の魅力は勧善懲悪で一話完結にあります。そしてヒーロードラマは決して廃れないという気持ちはあるんです。最近のドラマって疲れてしまいます。NetflixやAmazonのドラマを観る時は正座して観なければいけないような、映画館と同じような感覚で、ながら視聴ができない。ある程度決まった展開でハッピーエンドの作品、そういうドラマもジャンルとしては、私は残ると思っています。その中

に時代劇も存在します。あともう一つ我々がやっていてすごく大事なことは、時代劇って日本人の礼節、美意識がきっちり入っている。だから漫画原作の時代劇を作っているのと違って、日本人の価値観を織り込んだものをずっと続けてきているわけです。これも日本舞踊と同じで文化の継承だと思っていて、だからここは頑張らなければいけない所だと思っているんです。今の現代ドラマはそんなこと関係ないわけです。今年は私自身にとっても大変大きな出来事があって、それはこの前のエミー賞で「将軍」が世界No.1のドラマになったことです。過去最高の18部門を獲得した。これってものすごく大きいことで、それまでアメリカ人が観る作品で字幕のドラマが大ヒットするなんて考えられなかったんです。それが字幕8割、ほとんど日本語で描かれている。そして真田さんの言葉でいえば、オーセンティックな時代劇なわけです。



出典: Disney+ ウェブサイト <https://disneyplus.disney.co.jp/>

私が見ても今、日本の我々が作る時代劇でもこんな古い言い回し、使わないよね、というようなセリフがあったり、所作もすごくこだわって撮影されている。そこには日本人の時代劇スタッフが多く参加していて、その人達も評価されたわけです。日本の時代劇に関していえば、「将軍」のような歴史エピソード、ネタが山ほどありますし、それが海外で製作されて、あれだけ多くの人に支持され人気を得たということはすごく大きな可能性を広げていただいたこととなります。そして、真田さんがスピーチの中で「今まで時代劇を継承してきてくれた人たちに、心より感謝申し上げます」と仰っていて、弊社もその自負があるだけに非常に感動いたしました。ついに時代劇は国境を越えた、それは本当に日本語の時代劇が国境を越えて認められたということなので、これはやはりある種の黒船ですね、日本はなんだかんだ言って、逆輸入に弱いですし、外圧に弱い。噂では最近「将軍」みたいなものを作りたいっていう、海外のプロダクションが結構あるそうなんです。日本で作ろうと思っている限りは予算の問題もありますが、「将軍」は我々の作っている時代劇の100倍くらいの製作費で作っているわけですから、それに追いつこうというよりは、もっと海外と協力してやっていきたい。そして我々が日頃付き合っている京都の太秦の撮影所、ここもまだ存在しているわけです。技術者はいるし、衣装もあるし、時代劇のノウハウが集積している。今回真田さんはそれをうまくアメリカと融合させて作ったわけですね。作り上げたものはアメリカのドラマじゃなくて、日本

のドラマとして作り上げている。本当に画期的なことです。日本の時代劇の100年近いノウハウを海外と組み合わせることによって活かす道を真田さんが開拓してくれた。国内では最近どこのプロダクションもメディアも海外で通用する作品を目指すと言っています。その中にこのような成功事例が出てくると、時代劇で勝負しようという流れも出てくるはずですよ。そういう意味では「将軍」という作品1本で時代劇の潮目が大きく変わってくるかもしれない。ちなみに海外の人に「将軍」の何がいいのかって聞いたら、まさか自分たちの国が、400年前に日本とそんなに関係していたとは思わなかったと…。これも一つのヒントで、日本史のグローバルズムという観点においては世界に対して発信できるストーリーがいっぱいあるんです。



西川

狂言師の大御所の先生が狂言の笑いのテーマを突き詰めていくと、そんなにはないんですよ。と仰るわけですよ。例えばすごくまじめな人が思わず転んじゃったとか、そういう意外性であったり。結局はアレンジでいろんな作品が出来ている、それは悲劇でも同じだと思っんですね。人が感動するポイントというのが、親子の情愛であったり、男女の恋愛であったり、日本の侍でいえば主従関係の何かであるとか。真田さんのドラマはアメリカの人にとって、食いつくポイントがあった。だから撒き餌じゃないけれど、若い人が共感するものが一つ入ることによって、すごく古いものでも興味を持ってもらえる可能性があるのかなと思ったんですけどね。



白石 そうですね。我々が時代劇を今まで作るなかでグローバリズムなんてあまり考えないじゃないですか。ところがやはりある程度の予算をかけて、グローバルな視点における日本史というものを描くと、我々が気づかなかった魅力がいろんなところに散りばめられていて…、「将軍」は老人ばかりが見たのかということそんなことはなくて、若い人も含めて見ているわけです。ですから、まだまだアイデアの余地があるかなと思います。若い人に受けるために、なんか迎合してやってみる。それこそ漫画原作でやってみたり、現代語使ってみたり、そういうことではないような気がします。狂言の話でいうと「水戸黄門」なんかも実は感動のパターンというのは限られていて、バリエーションで作っているんです。だから変にターゲットのことでばかりを考えて、そこにすり寄るというのは、逆にコンテンツの魅力をなくす、ということも「将軍」がまさしく教えてくれた。

西川 本物志向なんでしょうね。

白石 そうですね。日本史を知っている人たちにとってはおなじみのストーリーだとしても、海外の人には本当に新鮮なんだと…。そういう部分ではまだまだ研究していけばいろいろ発見があるはずですよ。時代劇や日本舞踊にとって「将軍」みたいなものが作られ、これから海外でもオーセンティックな日本のものが作られていく流れができれば有難いですね。今現在でもB級の忍者ものとか侍ものは山ほど世界では作られているらしいんですよ。

西川 今でもそうなんですか？

白石 今でもそうです。海外で日本の企業が「忍者 VS 侍」というYouTubeチャンネルを展開していて、結構なヒット数らしいです。そういう下地があるところに本格的なものを提供していきたいと思っています。



SAMURAI VS NINJA

出典: Youtubeチャンネル @samuraivsninja

<https://www.youtube.com/channel/UCJNSk5hzoa-JemxhzRQGcw>

そして、たとえ「なんちゃって時代劇」でも着物は着ているんです。その時代は全部着物なわけですよ。時代劇コンテンツが増えれば増えるほど、海外の人にとって着物ってものが身近になってくる。そういうこともあると思うんです。今の自分たちの洋服とは決定的に違うものに関して関心を示す人たちっていっぱい出てくると思います。海外の人たちから見ると、着物を着ている人達、というのは絶対に印象に残るはずなんです。そういう点でもチャンスが生まれてくると思うんです。例えば明治時代とか大正時代って子供たちは、お城の「お姫様」というとみんな着物を

着ているお姫様を思い描いていたと思うんですけども、昭和の戦後になると、お姫様はディズニーの影響で中世ヨーロッパのお姫様をイメージするわけです。お姫様一つにしてもその時代のコンテンツの影響によって、思い描くものが変わってくる。ということは世界でそれだけ時代劇が増えてくれば、海外の方が着物に興味を示す場が広がっていく。時代劇が普及していくということはイコール着物文化のアピールのチャンスにもなるので…。だからやはり逆輸入ですね。

西川 なんだか情けないですけどね。

白石 そうなんです。やはりもう慣れ親しんでしまったものを新たに注目させるというのは非常に難しいですけど、そういうことを知らなかった人たちに知らしめるというのは、手段としてはあるかなと…。そういうチャンスをこれからは狙っていくしかないですね。海外の「将軍」ブームによって、日本の配信などでも、もっと時代劇を作ろうという流れができればそれだけマーケットが広がるわけで、それは大いに期待している所です。

西川 本当に広い意味で我々のやっていること、時代劇の製作、和の文化というのは発信していかなければいけないということですね。今日はありがとうございました。今後ともどうぞよろしくお願いいたします。



PROFILE

しらいし どういちろう

白石 統一郎



1959年 11月20日生

1983年 3月 慶應大学経済学部 卒

1983年 4月 株式会社電通 入社

営業局 (花王石鹸)、テレビ局企画推進部 (番組企画制作)、テレビ局CX、TBS 担当
エンタテインメント事業局 (映画・アニメ制作)



2011年6月 (株)C.A.L 出向 取締役制作本部長

2013年6月 (株)C.A.L 代表取締役担当作業

一社提供TV番組

東芝、ホンダ、日本生命、花王、アサヒビール、東レ、キヤノン等

企画プロデュース作品

TX「タモリの音楽は世界だ」
MBS「タモリのジャングルTV」
DVD「6月の勝利の歌は忘れない」
EX「キヤノンスペシャル」等々

映画製作出資作品

「スシ王子」「ゼロの焦点」「座頭市 (北野武)」
「日本沈没」「20世紀少年」「おくりびと」
「ディアドクター」「スタジオジブリ作品」
「13人の刺客」「阪急電車」等々

CAL 企画プロデュース作品

劇場映画 「桜姫」「忍たま乱太郎」
「女が眠る時」「MIFUNE」
TV番組 「パーフェクトブルー」(TBS 連ドラ)
「大岡越前」(NHK-BS 連ドラ)
「ぼんくら」(NHK 総合 連ドラ)
「水戸黄門」(BS-TBS 連ドラ) 等々



勸進帳の系譜⑤

東京大学名誉教授

古井戸 秀夫



西川扇藏（10世）が歌舞伎十八番『勸進帳』を「素踊り」にしてみようと考えたのは、平成4年（1992）。その年の芸術祭の「祝典」（オープニング）として、文化庁から委嘱されたものでした。翌々年には、日本舞踊振興財団主催「競宴」で再演。さらに平成19年には、会場を国立劇場から歌舞伎座に移して三演。このときは、日本舞踊協会公演の第50回記念の舞台でした。三度とも、主役の弁慶は西川扇藏、相手役の富樫は花柳芳次郎（のちの2世壽応）。前の年に急逝した泉徳右衛門とともに、三人で「三樹会」を結成した、盟友でした。三樹とは、三人が三つの樹となり、舞踊界に大きな根をはる意で、「樹」には、そのためには踊りの「鬼」となる、決意もこめられていました。結成から23年、それぞれ舞踊界の太い幹となった、二人の共演が成し遂げた舞台成果でした。

再演に際し演出・振付の西川扇藏は、難しい課題に挑むその情念は、

ご先祖4世扇藏への畏敬の念だけでなく、自分自身の振付師としての創作意欲にあったと述べています。具体的には、作品のテーマを伝えるには、いかなる日本舞踊の独創性を発揮しなければならないか。テーマとされたのは、弁慶の人間性と、それを理解し受けとめた富樫との友情でした。そのために扇藏が選んだ手法、それが「ツレ舞」でした。前半のハイライトは、「勸進帳」の「読み上げ」を「勸進の舞」にした、二人の舞にありました。廬舎那仏（大仏）建立の由来を長唄が唄いはじめると、弁慶にツレて富樫も舞う。二人の扇が揃って舞ううちに、弁慶を疑う富樫の心は解け、その人間性にこころを打たれるのでした。舞いおえると弁慶は、富樫に勸進を勧めます。「一紙半銭」でも奉財をすれば、この世の安楽はもちろん、来世でも数千蓮華の上に坐すと説く、弁慶の宗教者としての威厳にも富樫はこころ打たれるのでした。



出典：JATDT舞台美術作品データベース ウェブサイト <https://sdda.jatdt.or.jp/>

資料名：「素踊り勸進帳」舞台装置図・上演開始日1994年10月・作家 全井俊一郎

別れに舞う「延年の舞」にも、富樫とのツレ舞が付きましました。盃を交わした二人は、「序の舞」の笛の音とともに力強く、ゆっくりと舞います。颯爽とテンポよく舞う能楽の「男舞」とは異なる、日本舞踊の「男舞」の表現でした。途中から三味線が入ると、酒の酔いが回りはじめたのでしょうか、二人は打ち解けて楽しそうに舞うのでした。長唄が入り「延年の舞」になると、弁慶ひとりの踊りになります。きびきびとした動き、そのなかに際立つ物まねの振りは、10世扇藏が追い求め続けた「素踊り」の面白さでした。扇藏の素踊りは、青年期に師事した6世藤間勘十郎（2世勘祖）譲りの芸でした。

金井俊一郎の舞台装置図は、JATDT（日本舞台美術協会）のホームページの「舞台美術作品データベース」で公開されています。

素踊りらしく背景は屏風、その屏風に松が描かれていました。この屏風を引いて取ると、海辺の景色に替わる演出でした。海辺になった後半の見どころは、弁慶の「物語」でした。弁慶、義経、山伏、すべてのせりふをカット、すぐに長唄の「ついに泣かぬ弁慶も」になり、「判官御手を取り給い」から「鎧にそいし袖マクラ」に飛ぶ構成は、長唄の素唄に倣ったものでした。ここでも、扇藏の振付は、弁慶ひとりの物語を、義経と二人立ちに仕立て直しています。さらに、弁慶とともに義経が踊ると、7人の山伏も一緒に踊りはじめました。「あるときは船に浮かび」では、9人の舞踊家が舟を漕ぎ、「またあるときは、山背の」では、9人が揃って馬を御し

ます。勇躍して踊る群舞も、「素踊り勸進帳」の魅力のひとつになりました。色目は違っても全員が紋付き袴、統一された扮装が素踊りの群舞を生む、母体になっていたのでしょうか。「素踊り勸進帳」は、昭和59年（1984）に初演された「七騎落」と並ぶ、扇藏の「素踊りの群舞」の代表作となりました。令和3年には、日本舞踊協会の「とどけ明日へ」で、未来に伝承する曲に選ばれました。東京公演の弁慶は花柳流、関西公演は若柳流、西川扇藏の指導のもと他流の舞踊家がこの曲に挑戦したことも、記憶に新しいところでしょう。

書き下ろしの台本を見ると、長唄の聞かせどころも容赦なく、切り取られたことが分かります。「勸進帳」の前に踊る、弁慶ら山伏の「最後の勤め」も、そのひとつでした。「それ山伏といっぱ」の長唄は削除され、歌舞伎にはなかった「^{ぼんでんたいしゃく}梵天帝釈、^ふ不動明王、^{どうみょうおう}五道冥官、^{ごどうのみょうかん}唵阿毘羅^{おんあびら}吽^{うん}吽^{けん}缺」の呪文で7人が勇躍して踊ることになりました。「延年の舞」の前には、酒に浮かれて5人の番卒も踊ります。軽くコミカルな群舞も、効果的なアクセントになりました。歌舞伎十八番の「勸進帳」から誕生した、日本舞踊の「勸進帳」でした。



出典：(公社)日本舞踊協会 ウェブサイト <http://www.nihonbuyou.or.jp/>
2021年とどけ明日へ 未来へつなく日本舞踊公演・長唄「素踊り勸進帳」
振付 十世宗家西川扇藏



日本舞踊で覗く江戸

と

その暮らし、その魅力②



講師 小林 直弥 氏
(日本大学芸術学部 教授)

(…前号に続き)

一方、赤坂、日枝神社の山王祭の様子を描いた清元「申酉（お祭り）」は、なぜ題名が「申酉」なのかと言いますと、江戸城から見て西南方向は「裏鬼門」と言われ、鬼門は鬼が通る道があり、その「鬼門」を守るために江戸の日枝神社が創建されたそうです。また、日枝神社の神は徳川氏の産土神でもありました。したがって江戸城から見て鬼門の方位に鎮座し江戸城を守護する神社の方向が「申」と「酉」の方向だったので「申酉」と呼ばれていたようです。ちなみにその逆の北東にある鬼門「表鬼門」には上野の寛永寺があります。また、日枝神社のお祭りでは勤番の町が申の烏帽子の狩衣姿の山車を出し、大伝馬町からは酉に鞆鼓の山車を出します。これも申酉になっています。神田祭もそうですが、お祭りには鳶職

とか芸者が世話役などを中心に勤めていましたので、その風情を出す演出で日本舞踊作品でも鳶や芸者の役で出ます。

また、「祭と喧嘩は江戸の華」なんていいますが、祭には喧嘩が付き物。威勢の良い若い衆が「からみ」で出てきますし、芸者が少し酔いが回り艶やかに踊ったり、鳶頭だけに大山詣での話や木遣りも歌われたりと、まさに江戸の華そのものの風情が日本舞踊で再現され、それだけでも楽しめますね。その他、江戸の祭と言えやはり「三社祭」でしょう。まず「三社祭」は、隅田川の漁師の兄弟が網で漁をしていると魚は取れず、何度川へ戻しても人形が釣れてしまうという伝説が基にあり、清元「三社祭」でも「こいつは稀有だわえ」という台詞があるほど。それで漁師の兄弟は土地の知者に人形を見せて意見を聞いたところ、これは「聖観音様である」としてお祀りしたのが浅



出典:天竺老人ウェブサイト <https://www.tenjukuroujin.jp/>
「神田大明神御祭礼」絵師・三代目歌川豊国



出典:(公社)日本舞踊協会ウェブサイト <http://www.nihonbuyou.or.jp/>
2022年とどけ明日へ～継承の轍～日本舞踊公演・清元「三社祭」



出典:国立国会図書館デジタルコレクション ウェブサイト <https://dl.ndl.go.jp/>
北斎「踊獨稽古」より悪玉踊り(部分)



出典:ウィキペディアフリー百科事典 <https://ja.wikipedia.org/wiki/>
「江島生島事件」

草寺の起源というわけです。この漁師の兄弟と土地の知者をお祀りして三社権現としてお祀りしたのが浅草寺の本堂隣にあります浅草神社です。そして、この伝説に基づき開催されるお祭りが三社祭です。また、清元「三社祭」に出てくる善玉・悪玉というキャラクターは、山東京伝という当時の絵師が黄表紙に描いたのがきっかけで、モチーフは当時の民間信仰に、人間の体の中には善玉と悪玉があると信じられていたことに由来し、それを絵に描いてみたという訳です。

それを具象化したものが、黄表紙「心学早染草」の中に登場しています。善玉が勝つといいことをする、悪玉が勝つと悪い事をしてしまう、そんな洒落た奇妙奇天烈さを踊ってみせたのが清元「三社祭」の面白いところです。

ここからは、歌舞伎と吉原のお話をしましょう。江戸には幕府公認の歌舞伎専用の芝居小屋が、当初は四座ありました。その中の一つに山村座があったのですが、山村座は途中でお取りつぶしになってしまいます。何故かと言えば山村座の人気俳優で京、大坂の上方出身の役者、生島新五郎が、江戸城の大奥御年寄役の江島と恋仲になって

いた、しかもデートのせいで江島は江戸城の門限に間に合わず城内へ入れず、そのため問題発覚となった「江島生島事件」が起き、幕府は関係者千四百名を処罰、江島は信濃の高遠へ送られ、生島は三宅島へ遠島になる大事件となりました。その後の物語を日本舞踊作品では、長唄「江島生島」で作品化していますが、事件後には山村座も興行できなくなり、中村座、森田座、市村座が官許三座と言われるようになりました。この事件の後、天保の改革によって歌舞伎の興行は、木挽町、堺町、葺屋町から、浅草の猿若町に移って幕末まで続いていきます。

さて、江戸吉原は当初人形町にありましたが、「明暦の大火」という江戸を焼き尽くした大火事が起き、浅草の北西部の田圃の中に移動させられます。これが新吉原です。新吉原へは、日本堤から歩いて行く方法と浅草寺から馬に乗ってくる方法、また日本堤を土手八丁なんていいますが、舟（猪牙船）でやってくる人もいれば、馬に乗ってやってくる人、それからショートカットで田圃の中を早駆けてやってくる人もいました。長唄「供奴」は田圃の中を駆け抜け主人を追って吉原仲ノ町ま



で来たけれどという筋ですね。また、吉原といえば「張り」と意気地」なんていいまして、長唄「京鹿子娘道成寺」の歌詞の中にも詠われていますが、吉原では最上位の花魁と馴染みになるのはとても大変でした。まずは少なくとも三回は通い、花魁に気に入ってもらえなければならなかったのです。まず一度目は、例え会えたとしても単に互いにあいさつのみで言葉も交わさないで終了。二度目は「裏を返す」と言って、花魁に認めてもらえれば煙草盆返してもらい、もし返してもらえなかったら、それでももう会うことは叶いません。まためでたく馴染みになりますと、客は主さんと呼ばれ、主が全額を負担し大宴会を開いたりするそうで、さらに馴染みの間は、他の花魁とはお付き合い厳禁。もし浮気なんぞすれば、主の客は、大勢の前で髷を切られたといわれています。そんな吉原には伝説の花魁が三人います。一人目は勝山太夫。日本舞踊では長唄「水仙丹前」という作品がありますが、花魁の髷には、伊

達兵庫という髷が有名ですが、勝山という髷も有名で勝山の人気に由来しています。この勝山はとても江戸っ子らしい花魁でしたが、実は勝山太夫の出身は、丹前風呂という当時伊達男や丹前振りて闊歩した侍が通う人気風俗風呂屋の湯女でしたが、その後吉原（人形町）の花魁になりました。ちなみに吉原というと花魁道中での「外八文字」が有名ですが、これを考案したのは勝山太夫と言われ、京や大坂では「内八文字」の歩みが主流でした。さて二人目は、さらに有名な高尾大夫です。高尾もとても有名な花魁で、その名は伝説となり何代か引き継がれ、特に「万治高尾」と呼ばれた花魁が有名でした。最後、三人目は玉菊太夫で、美しく大変な人気でしたが、僅か二十五歳の若さで亡くなっています。これを弔うために吉原では玉菊太夫の霊を弔うため吉原俄という吉原の芸者衆や幫間も参加し、即席芝居や踊りを披露するイベントが行われるようになり、それが元になりできた日本舞踊には、清元「女



出典：浮世絵検索 ウェブサイト <https://hvrart/o/209063> 「江戸名所、新吉原中之町の桜」絵師・歌川広重



出典:浄世絵検索 ウェブサイト <https://hvr.art/o/318748> 「新吉原角街稲本樓ヨリ仲之街仁和賀一覽之図」絵師・歌川芳幾

くるまびき

車引」があります。ところで、新吉原で遊ぶにはどのくらいお金が必要だったのでしょうか。まず呼び出して宴会で同席してもらう料金を「揚代」といいますが、トップクラスの花魁では最低、一両（約十万円）からで当然十万円では済むわけではなく、馴染みになるまでには現代のお金で凡そ八十万円以上、月半分でも三十両（約二百四十万円位）以上、年間通うと現代のお金で約三千二百万円以上必要だったようです。また、花魁や遊女の暮らしとその後について少しお話すると、凡そ三つの可能性があったようです。まず一つ目は、なんとか高額で馴染みの主に身請けされるという結末です。記録では、花魁や遊女を吉原から足抜けさせるためには、最低でも三百五十両（約三千万円）以上かかると言われていますので、よほどの財力がないと好きだけではどうにもならないことがわかります。二つ目は、年季明けとって契約期間が終了し、吉原から出ることができたパターンですが、それができた花魁もごく少数ですがいたようです。そして、三つ目で一番多かったとされるが吉原

の中で死亡し吉原を出るという結末です。入るときは大門から、出るときは九郎助稲荷の小さい扉から出て、お歯黒ドブという汚い水が張ってある堀を抜けて、近くの浄閑寺に投げられて一生が終わってしまう。これが一番多く、このようなことは、人権上も道徳的にも到底許され肯定し賛美するような世界ではないのですが、一方で吉原は、江戸のファッションや文化の発信地でもありました。なんとも相反する矛盾した世界ですが、吉原の賑わいを歌舞伎で上演する構造が江戸時代を通して続いたため、日本舞踊の作品にも吉原の世界を映した歌舞伎から出た作品が圧倒的に多く伝承されているのは、吉原と歌舞伎の特異な利害関係や江戸の流行、文化を双方が代表していたことによるもので、とりわけ素踊りの作品で、ご祝儀曲でもある清元「北州」や「梅の春」、また長唄「松の緑」でも吉原遊廓やその世界が逆説的に粹に謳われ踊られています。

最後に、江戸の暮らしと大道の生業から日本舞踊作品を見てみましょう。江戸のお正月には「鳥追い」と呼ばれ

日本舞踊振興財団では、特別賛助会員制度を設け、
下記の方々にご支援をいただいております。
是非ご賛同お願い申し上げます。

-
- 会費 1口 10万円(1年間)
 - 特典 会報のご送付
会報・公演プログラム等にご芳名掲載
財団主催イベントにご招待
-



飯田 信子 (飯田不動産 代表)	(株)ビデオフォトサイトウ (代表取締役 海老原 利明)
飯田 良枝	西川 均
(有)かつら大阪屋 (代表取締役 長坂 誠一郎)	西川 守
歌舞伎座舞台(株)	(株)ホテルオークラ東京
(有)ギャラリー竹柳堂 (代表取締役 藤澤 繁)	藪本 俊一 ((株)古美術藪本 代表取締役)
松竹衣裳(株) (代表取締役 海老沢 孝裕)	山本化学工業(株) (代表取締役 山本 富造)
(株)瀧川峰晴堂 (代表取締役 瀧川 明行)	(株)吉 岡 (代表取締役 清水 裕)
東京信用金庫 (理事長 半澤 進)	

[敬称略]



財団の趣旨にご賛同いただける方は財団事務所までご連絡ください。
特別会員についてご説明します。その上で、ご希望の方には申し込み
書類をお送りさせていただきます。

財団事務局 TEL03-3354-5496

NBF活動報告

新宿区「こども文化体験プログラム」 - 日本舞踊 -

日 時：令和6年7月31日～令和6年8月2日
 会 場：新宿区四谷地域センター多目的ホール
 内 容：日本舞踊の基本的な動作、挨拶の仕方を習得
 その後概ね1曲を仕上げるよう稽古し発表会
 を行った。
 主 催：新宿区



NBF行事予定

第57回講演会

日 時：令和7年1月27日（月）
 会 場：東京信用金庫本店
 講 師：松竹衣裳(株) 細田周作氏
 内 容：第55回に引き続き
 「帯の結び方等についてのレクチャー」
 主 催：公益財団法人日本舞踊振興財団

幼稚園おどり教室

日 時：令和7年2月26日(水)
 会 場：東洋英和幼稚園
 内 容：幼稚園児を対象として普段手にすることの少
 ない邦楽器に触れ、日本舞踊に親しんでもら
 いその後、子どもに興味の持てるような演目
 を上演する。
 主 催：公益財団法人日本舞踊振興財団



新宿区日本舞踊鑑賞教室

日 時：令和6年11月13日(水)
 会 場：新宿区立淀橋第四小学校 体育館
 内 容：4年生を対象に日本舞踊についての簡単な
 レクチャーを行い、その後日本舞踊の一部
 を上演した。
 主 催：公益財団法人日本舞踊振興財団



淀橋第四小学校



公益財団法人 日本舞踊振興財団
「NBF」 No.65

発行 公益財団法人 日本舞踊振興財団
〒162-0066 東京都新宿区市谷台町8番12号

発行日 令和7年1月

ホームページはこちらから
<https://nihonbuyo.or.jp>





公益財団法人 日本舞踊振興財団

〒162-0066 東京都新宿区市谷台町8番12号

TEL:03-3354-5496

FAX:03-3353-5634

<https://nihonbuyo.or.jp>

E-mail:office@nihonbuyo.or.jp

